中川根ふる里通信

＝第2号＝

編集・発行・モア・クラブ中川根
連絡先　〒428-03
静岡県榛原郡中川根町上長尾790
中川根町役場総務課
ふる里通信係
TEL. 05475(6)1111
郵便振替口座(名古屋)7-81556

初夏の訪れ
みどりの風に伝えて

写真提供・諸田秀男様（高郷）

茶摘み風景（水川地区）　写真提供・諸田秀男様

遠い昔 祖先が見いだしたお茶の栽培は
長い年月 人々が汗と苦労でいてーみ
育てあげて 今日の全国に誇る
川根茶産地を 築きあげました。

「ちょっくらよって一杯のんでいかんかのー」
とすすめる お茶
「服にしまいか」と仕事の合間に飲むお茶
家族が「おつかれさま」とさし出す一杯のお茶
食後に飲むお茶ー　と
お茶は知らず知らずのうちに 人と人の
あたたかいふれあいのなかだちをしているのです。
水と空気の様に日常生活に溶けこんでいる
このすばらしいお茶を大切に育て 未来に
引き継いで行くことが お茶どころ
中川根に課せられた使命であると思います。

茶摘み歌

〽お茶をつむなら 根葉から おつみ
根葉にゃ 芽(芯)もあることもある
（トントコトン）

〽八十八夜が 二度ありゃ良かろ
かわい主さんに 二度会える

〽川根 良いとこ 良い茶の出どこ
娘やりたや 婿ほしいよ

〽つめばたまるよ ビンカの葉でも
つまにゃ たまらぬ 芭蕉葉でも

※うら若い娘たちが お茶時になると 平野部から 山間部(川根方面)に続々と入ってきました。娘たちは茶摘みの手より口がよく動きました。茶摘み歌は 皆が心を合わせ仕事の能率もあげるというたいへん実質的な意味を 持っていました。

母校は今（その２）

藤川小学校

藤川小学校が徳山小学校と実質統合したのは四十六年七月、すでに満十五年になる。廃校となった校舎は五十二年、集会所の建設に伴って取りこわされた。

校庭に大きく枝を張っていた桜の老樹も二十一年前に伐りとられ、今、グランドに立って見渡しても、いつての母校のイメージを彷彿させるものは殆ど残されていない。

僕らが学んだ校舎は、取りこわされた建物（昭和三十一年建築）より一時代前のもので、一番西側が職員室、廊下を隔てて東へ高二、高一と二、三、四年と右ひだ教室が並び、高一と三年の間が生徒の出入口、東端は一部二階建てで上が裁縫室、下が五年の教室だった。職員室の裏には離れて一年の教室があり、渡り廊下でつながっていた。

校舎裏は陽当りが悪く、冬になると氷解けて凍りもぬかるんでいた。あの頃は年に一、二度は雪合戦もできた。大雪の朝は、運動場前の竹藪が雪の重みで大きくたわみ、雪折れの音が教室まで聞えてきたものだ。

今は、竹に代って杉の樹が亭亭と育ち、視界をさえぎる形になっている。

校庭の桜を見られないのも淋しいが、ひばりが高音をあげながらその実をつっぱんでいた肋木のそばの梅檀の木も今はない。

昭和初期の校舎は運動場と同じ平面に建てられていて校地は平らだった。だが二十八年改築の際、敷地を一段高くして統二階十教室の校舎が建設された。今、その跡地は駐車場になっている。

集会所は校地の一番東側に建てられていて、三百四十名収容の集会室ほか和室、調理室等が整備され、今ではなくてはならない区民のための施設になっている。夏休みのレジャーになると町外から林間学習に訪れる親子も絶耐あるという。

集会所の前には、ゲートボールなどの器具置場兼休憩所の簡易な建物もあり、藤五郎どんの祭の坂道を登ってきたなりも昔と大分環境が変った。

グランドは、年間通して子供会から老人クラブまで間断なく利用され、人のざわめきもきかれるそうだが、平日の真昼の時間帯はひっそりと静かで、広い運動場に人影もなく、たまに訪れる者には、やはり、廃校のわびしさが感じられる。

神社のたたずまいも昔と変った。社務所が前の方に移築され、社殿のまわりの境内木もまばらになって、氏神様が、何かぽつんと置かれたような形で鎮座している。

道路が整備されて、お宮の石段を登り降りするのも楽になり、表参道もさびれた感じだ。昔災禍に遭った「大楠樹」も枯木の状態で根本の部分が残っていたが七、八年前に伐られたという。今はその跡に二世の樟が植えられている。

卒業後、早くも半世紀近く、歳月が流れた。近くに住んでいてもふるさとはなつかしく、少年の日の夢を育くまれた母校の姿はいつまでも忘れ難い。

原田義作

投稿

母なるふる里に想いを寄せて

藤川出身　大西春雄

昭和一桁の私も　何時しか　実年と言われる年となり　ふる里が恋しく想われます。私の母校は　高台に有った藤川小学校・神社が学校と隣接していた為　校庭と境内を混同視して良い遊び場でした。戦時中の為神社には　出征兵士の武運長久の札の多かった事が　思い浮びます。　休み時間に神社から『豆』を持ち出し（豆はマメで帰るようにと大豆を使った）境内に蒔いて　芽の出るのを楽しんだ思い出。石段の下に有った　大楠の木の皮を剥いで　ニッキの匂いがするのなんて嗅いだ事が　思い浮ばれます。　今はその楠の木も　他界してしまい？心の友達を失った思いがします。

又・小学校二三年の頃・西午の山の上に有った　平松へ　遠足ににぎりめしを持って行き　食べた事も懐かしく　その平松も　今は無く年には勝てなかった様です。

ふる里を後にして三十年『字をたつ』『しとを打つ』『そおづら』など心の奥に有る方言を思い出し　ふる里に想いを寄せて居る私です。

〒238 横須賀市坂本町五ノ五十一（日産自動車㈱勤務）

書家　柿下木冠さん紹介　文沢出身　四十六才

本名　柿下康次さん（万寿雄さん二男）

住所　静岡市丸子四ノ十七ノ二十　〒421

『中川根ふる里通信』『母校は今』『四季の里』のタイトル字を柿下木冠さんが書いて下さいました。木冠さんは徳山中学校卒業後・市立静岡商業に入学してから書を始められ・自ら書道部を創設されました。「習字だと形よく書かないとためだけどね・高校は芸術科目だから　そこに使うが書と結びつくような秘密が隠されているんではないですか。」県高校書道展何回か入賞・県知事賞受賞・卒業後は山崎大拓・手島右卿先生に師事されて・後毎日書道展・独立書展・日展など数々の入選を果たされ書家となられる決心をされたということです。

柿下さんは・書の国際性ということからも海外へ出かけて活躍されています。「日本の書道という事でなくて・書道技術という考えね・例えば風景を何かの文字に託して形象として表現すること。」視覚的に訴える作品は外国人に理解されやすいとのことです。

又・子供のころの生活が今の作品に影響しているとのことです「意識しないのに・作品の中に川根の印象がすごく左右して・今の発想につながっていますね」今後の御活躍を期待しております。

（中川根広報・第三回木冠書個展より）

現在・独立書人団会員・毎日書道展審査会員・県書道連盟常任理事・抱霞会同人・抱朴会会員など。主な作品収蔵先・三カ所美術館・ジョスリン美術館・オマハ市長室・県立美術館・米国日本クラブなど

川根茶どころ小唄

作詞　高丘葉

(一)
川根よいとこ　ヨ
茶どころ小唄　ヨオ
あれさ鼻つく茶の香り
ほういほういやれこの　ほい
ほんに　そじゃないか
※えい　そじゃないか
あかねだすきの目にしみる
※お茶籠たいてホーイホイ

(二)
川根銘茶は　ヨ
日本一じゃ　ヨオ
あれさ近くで　川の音
※川も名代の大井川

※くり返える

〒433 浜松市萩丘五丁目四ノ十二
高木　一方

(三)(四)は略させていただきました。どなたか作曲されて見てはいかがでしょう

母なる大地にたち
母なる学校に勤めて

中川根中学校長　髙畑　肇

一年生が、五月の末、「史跡探訪」と名づけて、肩満寺・水川の親音堂・徳山の浅間神社・大泉院・田野口の津島神社と、約十六キロの行程を、町の史跡名所を巡る遠足を行った。

四月入学の、八十五名の一年生が、町内四つの小学校から集まって、互いに中川根中学校に学ぶ者同志の友情と連帯の絆を固くしたのは勿論だが、生徒たちは、町にいて、町のことを知らなかった自身に気づくと同時に、わが町中川根の、美しさ、よさを、喜びと驚きの中に発見したようである。

多くの生徒が、異口同音に、その感想を述べている。

「今まで、町の自慢は、お茶ぐらいしかないと思っていたが、緑あふれる美しい自然と、豊かな人情の里に人々がはぐくみ、そこには、郷土を興した先人たちが眠り、いくつかの寺や神社が、何百年もの歴史を今に伝えていることがわかった。これからもっと、わが町中川根を知ることに努めたい。この里にいつまでもいたい。もし、ふる里を離れることがあっても、わが町中川根を、人々に、自慢して語れるように、これからを生きていきたい。」と。

父母、家族を愛し、ふる里を大事にし、県・国を誇りに思って語れる人が、はじめて、人間を大事にし、国家、世界を愛していける人間になると思う。

五年ぶりに中川根に帰り、三十年を間にして入った中川根中学校から、緑なす白羽の山と、清い流れの長尾川が望める。お宮さんの杉木立と、その下に展開する茶畑が見える。私は、今はとき、父母を偲び、共に山野をかけ巡り、川に遊んだ幼なな友達のこと、また、この学窓を巣立っていった多くの教え子たちをなつかしむ。

私は今、再び、われをはぐくみ、母なる大地にたち、われを育ててくれた母なる学校に勤める事を思い、今ここに学ぶ子らのために、その指導に努めることが、わが愛するふる里、中川根への最大の務めであると思っている。

1986，新茶レポート

"お茶香る緑の町" "ふくいくたる香り・まろやかなうま味の中川根銘茶" "茶柱をたてて豊かなむらづくり" など中川根は今もお茶を中心とした生活です。『ふる里通信』2号が皆様に届く頃は2番茶も終る頃だと思います。わがふるさとは1年中で1番輝いている時期です。

1番茶の摘み取りもひと区切りした6月初旬、キタハイ農協中川根製茶工場（松下勝利工場長）を上長尾の木村積さんに同行を願い、又、久野脇の諸田準一さん方（中川根茶商組合長）に今年の新茶の様子をお聞きしました。

今年は冬の寒干害、春先（4月10日前）の凍霜害もあり、新茶に影響があるかと心配されましたが、生産者の努力などで、平年以上に味と香気ある川根茶ができあがり、全国茶品評会など、上位の入賞の期待がかかっています。

キタハイ農協 中川根製茶工場概要

- 昭和45年・農協上長尾・徳山・田野口加工販売所が合併して現地（梅島下）に作られる。
- 職員数は　約20名
- 設備は　大型再生仕上機・合組機・冷蔵室（80kg可能）・小売・通信販売部など
- 年間販売額　13億7千万円
- 荒茶受入れ量　470224kg
  （中川根の荒茶生産量の65%強）
  数字はいずれも昭和60年度

住所・中川根町上長尾
TEL・05475(6)1142

川根茶

工場長よりのメッセージ

《ふるさとの山の香りあるお茶を飲んでいただき、生粋の川根茶の味を楽しんでください。当工場では市販よりお安くお茶を提供する様今後も努力していきますので是非御利用下さい。》……どうぞよろしくお願いします。

又、今後の課題として、『茶樹の若返りを計る必要がある』との事も、生産者の努力で乗り切る事ができると思います。

諸田さんの茶工場（金正園茶舗）は茶園に囲まれ明るい陽ざしに恵まれた場所にありました。

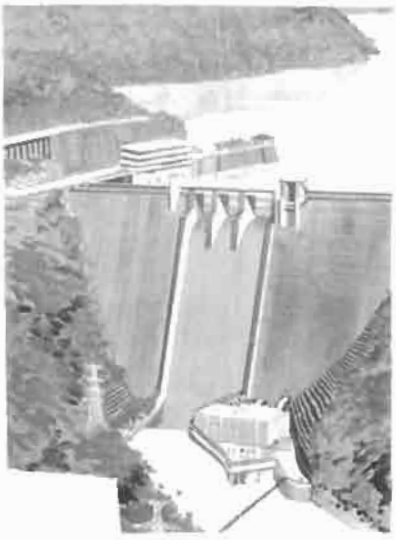
最近の若い人達を中心とした食生活の変化に緑茶はどう対応したらいいのか？の問に、

消費者ニーズの変化を意識しながら伝統の香りと味を大切にした川根茶のイメージを大切にしたい。そして、川根茶を直接消費者に届ける様、仕上げと販売の努力を積み重ねたい。との事でした。

川根出身の皆様・川根茶の良さを若い人にも地域の人にもお伝え下さい。味・香り・パッケージへの感想など編集部までお寄せ下さい。川根茶の向上のためよろしく願います。

（レポーター　長塚・野口）

大井川水系の特性と開発の歴史　NO1



南アルプスの地形は、地質学的山の一生から見て壮年期の比較的早い時期（早壮年期）と言われています。大井川の水源は標高約3000mの間の岳ですが、南アルプスをおおう無数の沢が山を削り、深いV字谷を形造って大井川本流となります。やがて満壮年期（例 北アルプス）になるまで山は削られ続けるわけですが、加えて中央構造帯に位置する為岩石はもろく、崩壊の起こり易い地質構造になっているため、特に台風雨時など大出水時には大量の土砂が川に流れこみます。（コーヒー色の濁流は皆様の記憶にあると思います。）

明治時代オランダの土木技師デレーケは日本の急流河川を「川ではない滝だ」と言ったそうですが、大井川も駿河湾に注ぐ約180km、急勾配で流域面積の小さい川でありながら降雨量（年間約3000mm）の多い流域の為流量は豊富であります。この気象及地形的条件から明治時代早くも水力発電所の開発に目が向けられ、以後現在まで11箇所の発電所が建設され、大井川は水力発電のメッカとなりました。

発電所の開発が進むにつれ、大井川中・上流域には様々な環境の変化が起こりました。地域に早い時期から電気の供給がされたこと、点在する集落は川が輸送手段（舟や木材搬出いかだ）だったのが昭和6年大井川鉄道が千頭まで開通しました。昭和20年代千頭から井川迄森林鉄道が出来ました。発電には貯水用のダムが必要です。川をせきとめ山を削る大土木工事に昭和初期から35年ごろまで、大井川中上流部は人口も増え、巨大なエネルギー開発に大変活気あふれたと言う事です。

そして今、大井川は下流利水をはかる為の建設省長島ダムの建設が着々と進行しています。ダム建設地上部、梅地、長島地区はほゞ半数の家屋が水没する為、移転する世帯・地区に残る人達と、かつて井川がたどった道を進んでいる様に思えます。又大井川上流（畑薙ダムより上流）に中部電力赤石発電所が建設を進めております。

さて、ふる里中川根の大井川の現状はどうなっていると思いますか？　以下次号に続きます。

☆購読者の皆様、大井川の思い出（遊んだ事・行事・場所など）ありましたら是非投稿、写真等の提供をお願いします。《編集部》

大札山・そばつぶ山　山犬段

自然の森観察会

5月31日～6月1日、天候晴
主催　中川根町

中川根町主催「自然の森観察会」が天候に恵まれた5月31日6月1日に中川根町最北の地、山犬段周辺で開かれました。県中部地方を中心に自然を愛する人達が大勢集まって来て1泊2日の研修を行いました。山犬段には静岡大学付属中川根演習林宿舎もあります。講師の方々も静岡大学、静岡植物研究会の先生方で中味の濃い御指導をいただきました。又町長の徳嶋さんも2日間研修に参加された事は『中川根の自然を町外の人にも知ってもらう』町のPRにもなったと思います。「今後も観察会を続けて行きたい」との言葉も伺いました。

ふる里出身の皆様　帰郷の際は自然一杯の山犬段へ登ってみませんか。
春、夏、秋と四季おりおりに山はすがたを変えて自然を愛する人をむかえてくれます。
冬は、車では無理です。（歩いてなら……　大札山位まで）

- 山犬段・奇麗粒山はブナやウラジロモミ、ヒメシャラ（さるすべり）の原生林（樹令300年位）があります。林の中は麓の林と違い明るく、木もれ日が根元にそそぎ多様な下草が見られます。かえて類も多く紅葉の時期は山一面錦絵となります。
- 生物は鳥類、昆虫、哺乳動物も住んでいます。観察会には朝5時に起きて鳥の観察に行きました。コマドリ、ウグイス、ホトトギス、カッコウなど声は聞こえてもすがたはみせませんでした。林道上部の岩場でニホンカモシカ2頭を見かけました。サルやリスも見られます。（落葉樹の実、や木の芽など、食べるものが豊富にあるのでしょう。）
- 大札山は、つつじの群生が見られます。赤ヤシオ、白ヤシオ、ミツ葉、ドウダン、などが5月初旬を中心に花が咲きます。展望は南アルプス、富士山、伊豆半島、駿河湾、遠州灘方面大パノラマが開けます。（その昔、秋葉神社の候補地となった為大札山と名付けられたとか、幼い時聞きました。）

＝県指定無形民俗文化財（芸能）＝
＝文化庁選択芸能＝

徳山の盆おどり

＝鹿人舞・ヒーヤイ（風流小唄踊）・狂言＝

「鹿人舞」で知られる、徳山の盆おどり」は、中川根町徳山の浅間神社の例祭、八月十五日の夜、行われる古い神事芸能である。

この盆おどりは、「鹿人舞」「ヒーヤイ」「狂言」の三つからなり、近世初期の歌舞伎踊りのおもかげを今に伝え、古風で優雅なおどりであるヒーヤイ、室町・今川文化の流れをくむと思われる能、狂言の原型、川根の辺地文化の中に生まれた土着の鹿人舞、この三者が渾然と動、混然一体となって融合、調和した姿で伝承された、ふるさと中川根にゆる猶通高い古典芸能である。

十五日の夕方になると露払いを先頭に、神輿、牡鹿、牝鹿をしたがえ、ひなっとこ、はやしかた、高張りちょうちん、はやしかた、神戦、氏子総代、踊り子その他の行列は、当屋を出発し、途中、受宮地蔵堂によって、「ヒーヤイ」を踊り、町内を回って、夕やみ迫る頃、神社に入り、「神寄せの式」を行い、設けられた舞台の上ではヒーヤイと狂言が舞台の回りでは鹿人舞が行なわれる。

●鹿人舞は露払い二名、牡鹿二名、牝鹿二名、ひなっとこ数名からなり、いずれも、その年二十歳になった若者によって行なわれていたが、（成人への通過儀礼として）現在では中学生が受け継いでいる。頭に作り物の鹿の頭をつけ、紺の股引きにはっぴ腹がけ、わらじばき、両手に紅白のだんだら巻きの棒を持ち前かがみになって、その棒の両端を絡み合わせるようにして回りながら、鉦、太鼓、横笛、拍子木などのお囃子に合わせて大股で鹿が跳ねるように舞う。初めは軽く静かに、やがて大股にさっそうと、また初の位置にもどる。これを三度繰り返して牡鹿が牝鹿をふり返ると鹿もはやし方も大声で「ソーリヤ・ウン・ハイ」と叫び十数米の距離を突っ走り、また静かな踊りにもどる。

この鹿人舞は昔、作物を荒らす鹿や獣などを追い払い豊作を祈ったことから起こったものと伝えられている。いつの頃からか、神社の境内で行なわれる盆踊り（ヒーヤイ）を慰安するものに変ったと言われている。

●ヒーヤイ踊りは昔は男が女装しておどったが現在では小・中学生の女の子がおどり手になっている。十歳前後の少女たちが京の舞妓風に、ゆかたの上にだらりの帯をしめた姿で古風で優雅、歌舞伎踊りの形式が見られる踊りである。現在では「神よせ」「桜花」「ぼたん」「新曽我」など十六番が残っている。土地の人が「ヒーヤイ」と言うのは、歌の中に「ヒーヤイ・ツン・テン・トン」というはやしことばが入っているからである。

●狂言、慶応四年に書いた台本に「昔より、猿楽とそう口うつし覚えしだけ書きおくぞや」とあり一番古い台本には宝暦九年卯七月（一七五九年）と記してあり、起源はかなり古いと言うことがわかる。

十五狂言のうち、現在は「頼光」「新曽我」しか行っていない。今年も小るさとの夏祭りが盛大に催され鹿人舞いの竹笛の音が山里にこだまするのである。

平谷（びらや）の流したい

夕映えに松明を燦めかせて
平谷の川瀬を流したいがゆく
そのむかし、　むらの人々が
水からの守りと、生活の俸ほせを祈って
行なはれ続けているならわし
その頼いを尾張の津島さんに献げんと
今年もとすす素朴なたいの灯り
いく世代かを引継がれて今宵もともる
つつましく、そして少く華麗に……

闘を挙げてのはげしい戦いの時代も
かそけく灯し続けた伝統の灯り
いつの頃からのならわしか誰もよく知らない
古老にきいてもずっと昔から続いているとまううのみ。
それ故にうかがはれるひとしおの神祝き

むかしは――
川舟の便で栄えたむら平谷を
いまは過疎にきいなみれて淋しきは
憂うべきもない
しかし――
たい流しの日にそれにいそしむ人の頬
に暗いかげはない
ひたすら俸ほせを祈って
いく年も続けられた由緒ある行事に
希望といつくしみを捧げる
限りない想いを乗せて流したい
薄暮の中を次第に遠ざかる
平谷の人々の明日の俸ほを祈る
思いを託して……

（稲沢　藤田幸男）

※ 平谷の流したいの起りは約66年前の文政年間といはれる。夏ゆうでつくった灯の台に松明をともして大井川に流し、村人の疫病と水難除けを祈念して尾張の国の津島神社に献灯する行事である。昔は大井川筋の各所で行はれたが、いまは平谷のみといはれる素朴な伝統行事である。

―― 毎年7月14日 ――

町内 祭 ご案内

7月	14日	平谷流したい
	23日	水門観音堂祭典
	30日	徳山 地蔵堂祭典
8月	9日	智満寺観音堂祭典（上長尾）
	15日	徳山浅間神社祭典、地名地区ぼんおどり大会
	16日	中川根町夏まつり＝第1回大井川清流祭＝
9月	15日	藤川大井神社　下泉八幡神社祭典
10月	5日	地名大井神社祭典（才1日曜日）
	10日	徳山神社祭典（野老本）
	12日	田野口津島神社祭典（才2日曜日）
	15日	水川神社祭典
	16日	瀬沢産土神社・久野脇八幡神社祭典
	17日	下長尾八幡神社祭典
	20日	上長尾八幡神社祭典
	22日	久保尾字向井地区日吉神社祭典
	24日	久保尾熊野権現祭典
	25日	久保尾字原山及下泉字小竹小野天満宮祭典
	28日	白羽神社祭典（尾名久保）
11月	3日	壱町河内文沢、八重垣神社祭典
	7日	上長尾字松尾　山の幸神社祭典

八百万（やおよろず）の神々が出雲の国へ
集まる神無月はもちろん旧暦の
ことでしょう。10月は祭一杯ですね。

8月13日 ～ 17日（日）

――お盆はふる里でおすごし下さい――

13日（夕）むかえだい
14日（朝）お墓まいり
15日　徳山のぼんおどり
　　地名地区ぼんおどり大会
16日　仏おくり（早朝）
　　第1回大井川清流祭

［お待ちしています］

御先祖様も、家族しんるいも、
なつかしい友も、

澄んだ空気、　おいしいお茶
森林浴　　水
川あそび、　魚つり

四季の里
夏休み竹細工教室
講師 地名 滝さも

まつり　まつり　まつり　祭　まつり　まつり　まつり

今年のお盆はふるさと"なかかわね"で！

中川根町夏まつり
第1回 大井川清涼祭

開催日　昭和61年8月16日(土)

会　場　大井川河川敷
（中川根町高郷地区前）

時　間　午後3時　開会宣言
午後6時30分　盆踊り
午後7時　花火大会

主　催　中川根町青年団
モアラブ中川根

後　援　中川根町
町内各種団体

来る8月16日、大井川の河原で、花火大会、盆踊り大会を中心とした、「大井川清涼祭」が開催されます。今年が初めての企画ですが、町全体の祭りとなるよう、また回を重ねることによって、"お盆"の恒例行事にしようということで、町の青年団の若者たちが中心となって、準備が進められています。15日には徳山で伝統芸能である"鹿ん舞"も行なわれます。
今年のお盆はふるさとで過ごされてはいかがですか。　（杉山）

モア・ラブ中川根から

★Uターンして、早六年余。あの時一才の子供も今は小学二年生
そのあと地元っ子も二人。月日の過ぎるのは早いものです。
・我が同級生（上長尾小）は六十人余。息子の組は二十八名。
・つり橋はなく駅まで歩いたものだが今はマイカーで送り迎え。
・川での泳ぎは出来なくてプールがある。
・手伝をしないのに楽しみにしていたお茶休みは今はない。
だけど。自然は今も昔も同じ。
シティボーイも今やすっかり田舎の人
ふる里はいいものです。　久野孝史（高郷・昭和二四年生）

★夏号ということで『新茶レポート』を企画しました。
お忙しい中、取材に心良く応じて下さった木村さん、諸田さん
ありがとうございました。川根地域の総力で工夫を積み重ねていけば将来は開けていくことでしょう。
勉強不足などで『大井川を考える』はお休みさせていただきます。
悪しからず……
以下次号につづく
長塚　誠（高郷）

編集室より
精力傾注の茶期も終りに近づいております。茶農家の皆さんから明るい語らいが聞かれると、ふる里も円高なんのその活気がつきます。麦秋と言っても麦を作る家はほとんどなく、平谷の流したいも材料不足。子供の頃、母に編んでもらったほたるかごはほたると共にまぼろしになってしまい時の変化が人間生活や生物生態を変えて行きます。
沢山の皆さんに『ふる里通信』講読会員になっていただき本当にありがとうございました。中川根をふる里として全国に点在している皆様より、あたたかいお言葉はげましの便りをいただき又御支援を賜りありがとうございました。モア・ラブ中川根一同本当にうれしく思います。皆様との相互交流がある事で『ふる里通信』はより一層の向上が出来るものと思います。
今後とも、投稿、お便り、お待ちしております。又知人の方にも『ふる里通信』をすすめてみて下さい。今回は、中川根広報、を役場よりいただき（コピーもあり）皆様に町の様子もお知らせ致します。紙面数も多いかと思いますが、次号（秋十月一日ごろ）までゆっくり、お読み下さい。暑い夏に向かい、緑茶パワーで健やかにおすごし下さい。《モア・ラブ中川根 ふる里だより編集係》

印刷・川根印刷所（徳山）
定価（郵送とも）100円